小林秀雄と『我が毒』

山　本　昭　彦

1．小林秀雄とは何だったのか？

おかしな問いかけではあるが、いまだに基本的な、必要な問いかけとも思っている。21世紀にもなり、ネットの時代になり、メディアは多様化し混合している時代にあって、「文学」を問うことにどれだけの意義があるのか、と弱気になってしまうこともある、が、しかしそれでも、今日読み返してみてやはり大きな存在である小林秀雄（1902-1983）を虚心に、ありのままをえぐり出す気持ちで読み、文学や「批評」について考えてみたい。対象は巨大で、また様々なアプローチが可能であろう。ここでは、小林と翻訳の関係の（ごく一部）について、スケッチをしておきたい。

「僕はいつも自分の為に翻訳した。翻訳は、言わば僕の原文熟読の一法に過ぎなかった。」とは、ヴァレリーの『テスト氏』を改訳した時に雑誌に発表した文章にみえる言葉である（「「テスト氏」の方法」、『小林秀雄全作品』第12集、p.229）。昭和14年のことで、サント＝ブーヴの『我が毒』を翻訳したのと同年のことである。小林は自身が集中して読み込むために翻訳を行っていた。ポーを読み抜いたボードレールやヴァレリー＝ラルボーを見るまでもなく、古今、翻訳は最良の読書法かもしれない。

小林はまた、ファーブルは全部僕が翻訳をやった、と豪語していた。一日に30枚訳し、家が立ち、女と暮らすだけ稼いでいた、と（全作品26の対談、p.128）。しかし一方、ジイド全集の翻訳について中村光夫が、「あれはぼくがやったんだ」とも言っている（「特別鼎談・「文学界」五十年のあゆみ」、

「文学界」1983年10月号、p.160頁)。

小林秀雄の翻訳ということで言えば、ランボーの翻訳[1]は、辞書も整っていない時代に行われたのであるから無理もないことではあるが、原文に忠実な正確な訳文であったとは言い難い。ただ、小林もそのことは自覚していて、版を改める度に修整が行われている。しかし、それよりなにより、あの力強い独特な調子、それまでの日本語になかった調子が、日本の近代詩・現代詩の方向を決定づけた、と言っても過言ではないだろう。翻訳、というよりも、新たな言葉、文体の創造であったし、その意味でランボーの精神に極めて近かった、とも言いうる。

戦後の小林は、これらのことに自覚的であったようだが、言葉少なにしか語っていない。言葉少なではあるが、しかし決定的なことを語っているとも思われる。

「悪条件とは何か。

文学は翻訳で読み、音楽はレコードで聞き、絵は複製で見る。誰も彼もが、そうして来たのだ、少なくとも、凡そ近代芸術に関する僕等の最初の開眼は、そういう経験に頼ってなされたのである。[…] 近代の日本文化が翻訳文化であるという事と、僕等の喜びも悲しみもその中にしかあり得なかったし、現在も未だないという事とは違うのである。[…] 愛情のない批判者ほど間違う者はない。現に食べている食物を何故ひたすらまずいと考えるのか。まずいと思えば消化不良になるだろう。」(『ゴッホの手紙』、全作品20、p.14-15)

2．批評家・小林秀雄と『我が毒』の翻訳

その小林は「批評」に向かった。周知の通り、近代日本の批評を確立したと言われるし、批評の神様ともみられた。

しかし小林秀雄が批評で行ったのは、対象について語ること以上に、自身

について語ることであった（後になって、批評に飽きた、ということも筆にするようになるし、戦後になっては対象が作家や文学作品以上に、骨董であったり、絵画作品であったりする（『近代絵画』など。このことについては稿を改めたい）。

よく知られた、小林の出発の頃の言葉。

「物指で何かを計れば何かは何んでも物指の結果になることは必定である。人は芸術的問題の決定に於て、批評するとは物指を使うだけでは足りないということ事を考えるべきである。批評するとは自己を語る事である、他人の作品をダシに使って自己を語る事である。」（「アシルと亀の子Ⅱ」、昭和５年、全作品１、p.216-217）

批評が自己を語る手段、ということは小林の初期の評論には一貫している。「批評とは竟に己れの夢を懐疑的に語ることではないのか！」（「様々なる意匠」、昭和４年、全作品１、p.138）

また、批評とは「様々な評家が纏った様々な意匠に対する反駁文に過ぎぬ」と言い、「裸で立っている自分を省みての自己弁解文に過ぎぬのです」ともしている（「私信」〔中山省三郎宛〕、昭和11年、全作品７、p.41）。

批評とは自己を語る事、他人（の作品）をダシに使って自己を語る事。これは小林独自の観念だろうか？それともどこかで学んだことなのか？

フランスにおける近代批評の確立者とみなされているのはサント＝ブーヴだが、小林はその『わが毒』を翻訳している。しかしまず、この選択が奇妙だ。サント＝ブーヴ（1904-1869）は膨大な『月曜閑談』などを残しているが、その翻訳は行っていない。サント＝ブーヴについては大学の辰野隆らの講義で聞いていたと思われる。作品そのものの分析というよりは、その作品を生みだした「人間」に興味が向かう。ゴシップをも厭わずとりあげ（時には、ゴシップの方が中心的興味とすら見える）、分析でも講義でもなく、評論でも論評でもなく、「閑談 causerie」として語る。ジャーナリズムに乗ったこのスタイルを確立したのがサント＝ブーヴである。確かにこの姿勢には小林秀雄の関心のあり方と通じるものがあった。「様々な意匠」には、「私に

は常に舞台より楽屋の方が面白い」、という言葉もあった。言ってみれば極めて19世紀的な批評のあり方で、プルーストが強く批判したこともよく知られていよう。(後に小林の批評の対象が文学よりも、絵画に移った時にも、絵を論じると言うよりはゴッホの手紙ばかり論じていたりする、ということもあるが、これについても稿を改めたい。)

そのサント＝ブーヴの、内面の真実を吐露した本が『わが毒 Mes poisons』であり、死後半世紀を経ての出版である。ヴィクトル・ジローの編集で1926年になって出版された。もちろんサント＝ブーヴは死後に出版されることを意識してはいただろうが、一般読者に宛てたものではなく「親しい友達の手だけに渡るべきもので」「人目に曝すものではない」とも書いている。「僕が或る人々を描いた肖像画のうちの或るものなぞは、この手帖で毒薬の状態にあるものが、少々薄められて色彩になった様なものだ。」(小林秀雄訳。全作品12、p.9-10)

小林は、批評の骨法を確認しようというつもりだったのか、これを選び、翻訳した(36歳の頃)。ここに残されているノートには、今では知られていない当時の作家・文人たちについての評言も多く、実際には19世紀フランスの様子、当時の作家・文人たちの日常に関するような細かな事まで知っていないとあまり面白くない、意味のない、本と言ってもいい。しかしサント＝ブーヴ自身の恋愛や失恋(たとえばユゴー夫人アデルとユゴーとの三人の関係。小林は泰子と中原のことを考えていたかもしれない)、そこから得た苦い思い、他者の観察も繰り返し繰り返し、連綿と綴られている。「序に代えて」の章には「これは僕の復讐の兵器廠だ、ここでは僕は本当の事を語っている」(p.11)という言葉もあったことが思い出される。

この中で「XX　自作について」という章に次のような言葉がみえる。

「サント・ブウヴは、自分の姿を映していない様な肖像は一つも書いていない、誰か他人を描くという口実の下に描き出すものは、常に彼自身の横顔である」(全作品12、p.141)

≪ S.-B ne fait pas un portrait qu'il ne s'y mire; sous prétexte de peindre quelqu'un, c'est toujours un profil de lui-même qu'il nous décrit.≫ (p.121)

また、「僕等は批評する時に、他人を判断するより遙かに多く自分を判断しているのだ」、とか「人間が他人の中から選び出し賞め上げるものは常に自分自身だ。批評家は誰でも、自分が連れて来る自分の気に入ったタイプのなかで、自己崇拝をやっているに過ぎないのである」などの言葉もみられる。

ジローは編著『我が毒』の序文において、本の成り立ちを説明するだけでなく、残された資料から、サント＝ブーヴの告白癖、日記癖にも言及している。そして、この序文ではサント＝ブーヴの批評作品というよりも、人間観察家（moraliste）としてのサント＝ブーヴその人を論じている。サント＝ブーヴが残した「手帖 Cahiers」についても、サント＝ブーヴが「情け容赦ない「真率さ」をもって判断した作家たち」やサント＝ブーヴ自身の哲学について教えてくれるだけでなく、とりわけサント＝ブーヴその人について教えてくれる、と言う。どんな批評家であっても、いかに客観的であろうと努めても、判断を下す時にはその人の精神の技と限界、その人の感受性の固有のニュアンスを顕してしまう。そしてジローは以下のように続ける。「ましてや、この批評家が印象主義や個人主義を常とし、自身が小説家あるいは詩人であると気取る時、自身の自我を何よりも他人の自我に対比させようとする時、そしてちょうどサント＝ブーヴのように、この批評家が自身のことを、「この批評家は自身の姿を映さない肖像（ポルトレ）は作らない。誰かを描き出すという口実の下に彼が我々に描写するのは常に彼自身の横顔なのである」と言うことが出来る時には。」[2)]

『我が毒』は昭和14年5月の出版で、小林秀雄（37歳）にとっては最後の翻訳であった。同年秋に発表された「人生の謎」は、サント＝ブーヴに言及している。「人生の謎［…］は次第に難しいものになる。齢をとればとる程複雑なものと感じられて来る。そしていよいよ裸な生き生きとしたものにな

って来る」というサント=ブーヴの言葉を引用し、これが自分にはこたえる、「一度聞いたら忘れられぬ音楽の一章句の様に、事にあたって心のうちで鳴る」と言う。「或る人の思想がある人に本当に伝わるという事はそういう具合のものだ、それ以外の伝わり方はない」とも言い、これが小林の意味する「思想」であることを語っている。

「音楽の一章句の様に、分析もならず、解釈もならぬ様な言葉を人の心に伝える事、これが詩人の希いである」と言い、「一度聞いたら忘れられない音楽の様な思想ばかりを探している」と書く（全作品12、p.245-246）。これが小林がサント＝ブーヴに求めていたものではなかっただろうか。

3．結　語

小林秀雄は「本物」ということを口にするが、必ずしも本物について語っているわけではなく、本物のもたらす「感動」についてばかり多く語っていたように思える。自身で書いている、ゴッホの複製の前で座り込んでしまった経験。本物のわかる人であったが、同時に本物を必要としていない、とも言えた。本物でなくとも感動できたということは、そこに自分を読み込んでいたからこそではないだろうか。複製技術による芸術作品であっても、それを前にした時の感動（鑑賞者の内的変化、ショック）を言語になおして捉えなおそうとすることに努めていた。これはすなわち一種の翻訳とも言い得る。小林秀雄の批評とは、このことの言語化であったように思われる。

注

1）今回の脚注では、編集部の、時代状況等諸々を勘案しての「武士の情け」方針により、いわゆる「誤訳」の指摘は行っていない。ただ、原文と違う意味の日本語が宛てられていて読解が困難と思われる箇所には、それ

となく「原文は〜の意味であるが・・・」のような形で注が添えてある。

2）Sainte-Beuve, *Mes poisons*, éd. Victor Giraud, Plon, 1926. Introduction, p.xv　この版を小林は翻訳の底本とした、と訳書に書いている（全作品12、p.170）。しかしジローの序文は小林は訳してはいない。なお、同じ年にもう一種類の翻訳が出ている。サント・ブウヴ著、石川湧訳『わが毒舌』、改造文庫、改造社出版、1939.10.30.刊。こちらにはジローの序文の訳もある。しかしあまり話題にはならなかったようであるし、その後も注目されてはいない。

参考文献

『小林秀雄全作品』全28集＋別巻4、新潮社、2002-2005
サント・ブウヴ著、小林秀雄訳『我が毒』、青木書店、1939.5.25.刊
Sainte-Beuve, *Mes poisons*, éd. Victor Giraud, Plon, 1926.
サント・ブウヴ著、石川湧訳『わが毒舌』、改造文庫、改造社出版、1939
宇波彰「小林秀雄における批評の方法」
（『日本文学研究資料叢書　小林秀雄』、吉田熙生編、有精堂、1977、所収）